

CONPAS

本牧BCで試験運用

関東地整 横浜で効率化検討会

国土交通省関東地方整備局は2日、横浜市内で「ICT（情報通信技術）を活用した横浜港コンテナ輸送効率化検討会」の第10回会合を開いた。会合では、横浜港・南本牧コンテナターミナル（CT）で稼働する新・港湾情報システム「CONPAS（コンパス）」の運用状況の報告に加え、本牧BCターミナルで今年度中にCONPASの試験運用を行うことなどを明らかにした。

冒頭あいさつした関東地整の石橋洋信副局長は「CONPASが3月30日から南本牧埠頭で常時稼働するようになったが、利用を拡大するためにはさらなる進化が必要だ。本牧BCターミナルでの試験運用や、サイバーポートとの連携推進など検討を重ねていきたい」と語った。

南本牧CTでのCONPASの利用状況では、10月時点で85店社が登録。稼働開始以降、1日当たりの予約件数の平均は217件、最大では592件の予約があった。待機時間に関する検証

では、4月22日から5月12日の期間中、非予約者の平均ゲート前待機時間が30分だった一方、予約者の待機時間は7分となったほか、CT全体における搬入車両の総待機時間の削減率は平均で約6%だった。

さらなる待機時間の削減に向けては、CONPASの利用率向上が必要だとし、トラック協会海上コンテナ部会を対象とした説明会の開催や、CT周辺に周知する横断幕を掲示するなどの広報活動を検討していくとした。

中に、搬出入予約機能の運用の検証に関する試験運用と、予約情報を活用したコンテナヤード内の荷役効率化に関する取り組みの検証に向けた試験運用を行うことを明らかにした。

コンテナを引き取りに来場する前に搬出対象のコンテナを移動。本船荷役の影響や不要な荷役りを回避することで、ヤード内のトレーラー滞留時間の短縮効果を検証する。試験運用の期間は、いずれも2週間程度を想定し、参加店社などは調整中としている。

荷役効率化に関する試験運用では、予約情報を活用し、トレーラーがコ